

## 清原宣賢自筆『日本書紀抄』所収『日本書紀』神代 卷傍訓の声点

内山, 弘  
九州大学大学院 (修士課程)

<https://doi.org/10.15017/11941>

---

出版情報 : 語文研究. 66/67, pp.144-156, 1989-06-10. 九州大学国語国文学会  
バージョン :  
権利関係 :

清原宣賢自筆『日本書紀抄』所収

## 『日本書紀』神代卷傍訓の声点

内山 弘

### はじめに

『日本書紀』の声点を声調資料として利用すると言えば、従来の対象は平安く鎌倉、せいぜい南北朝頃までの古写本に限られ、室町以降の書写の新しい写本は、古写本の存しない巻を除くと、あまり顧みられることはなかったように思う。確かに、『日本書紀』に声点が主として差されたのは平安から鎌倉にかけてのことのようであるから、声調資料は成立時期になるべく近い資料を選ぶという原則からすれば、右の如き状況も、言わば当然のことであった訳である。また、実際問題として、これまで南北朝以降の新しいアクセントを反映した声点を有する写本は、筆者の管見に入った限りでは、知られていないという事情もあった。成立の新しい写本の声点は古写本の声点をそのまま移点したものと考えれば、それで十分であったのである。

その意味で、本稿で取り上げる資料、清原宣賢自筆『日本書紀抄』（三冊、天理図書館蔵）<sup>注1</sup>所収の神代卷（以下、「書紀抄本」と略称）

は注目に値する。本文の声点（歌謡や訓注など、本文の漢字に差された声点。圏点）こそ古写本系の声点をそのまま踏襲しているもの、傍訓に差された声点（、の如き点）は、差し方がやや粗雑な嫌いはあるが、質、量ともに、古写本系の声点とは大きく様相を異にしているのである。その違いが何に起因するものなのか、またいかなる資料的性格を有するのか、興味の存するところである。

本稿では、以下主として卜部系『日本書紀』神代卷古写本と比較することにより、「書紀抄本」の声点（以下、特に断らない限り、「書紀抄本」の声点と言えば傍訓の声点を差す）の資料的性格の一斑なりとも明らかにしてみようと思う。

### 一、資料について

本稿の中心資料は「書紀抄本」であるが、それについて述べる前に、まずその「書紀抄本」を収める『日本書紀抄』について述べることにする。

『日本書紀抄』は、その奥書によれば、大永七年（一五二七）に、

幼くして実家（宣賢は卜部兼俱の第三子）の家督を継いだ子息兼右のために、宣賢自らが書き上げた神代巻の注釈書である。「書紀抄本」は細分して収められているとは言え、神代紀上下にわたって揃っており、一部欠けた箇所（神代紀上の最後の訓注部分38字）はあるものの、神代巻としてはまず完全なものと言ってよいであろう。

「書紀抄本」の出自については、『日本書紀抄』の奥書から何ら知ることは出来ないが、夙に大塚光信・小林千草両氏によって、一応の解明がなされている。それによると、「書紀抄本」の祖本は、最終的には「卜部兼俱献上本」<sup>注2</sup>なる本に遡るらしい。兼俱が兼致（宣賢の兄）とともに神代巻を書写、献上したことは、吉田家の第一の証本たる「乾元本」（後述）の奥書にも誇らしげに記されていることであるが、そこには「以累家之秘説」とあるのみで、一体どの本を書写したものか明らかでない。「乾元本」と考えたいところではあるけれども、古写本系の声点であるところの「書紀抄本」の本文の声点は、「乾元本」よりもむしろ「弘安本」（後述）の方に近い（「書紀抄本」との差声箇所一致率は「乾元本」78%、「弘安本」89%。「書紀抄本」に欠文がなければそれぞれも一致率は上がっていた筈）という事情もある故、あながちそうとも言い切れない。いずれにせよ、筆者は寡聞にして「卜部兼俱献上本」の所在を知らないのので、これ以上の追及は目下のところ不可能である。

ちなみに、転写本ではあるが「乾元本」（下巻）が、「卜部兼致読進本」（上巻）とともに、校合本として「書紀抄本」に関っていることを付記しておく。

次に、比較資料について述べる。本稿では、今回次の二本（影印）

を主として使用することにした。

- ① 弘安本『日本書紀』神代巻上下<sup>注3</sup> 弘安九年（二二八六）成立
- ② 乾元本『日本書紀』神代巻上下 乾元二年（一三〇三）成立
- ①・②ともに卜部系『日本書紀』（「書紀抄本」もその一種）で、二を争う古写本であり、証本として後世への影響も大であったと推定される。声点は豊富（特に「乾元本」）かつ正確であるから、「書紀抄本」との比較対照にはうってつけであろう。

更に次の本も、右に準ずるものとして使用した。

- ③ 嘉曆本『日本書紀』神代巻上下 嘉曆三年（一三三二）成立
- ①・②に準ずる古写本でもあり、独自の声点をも有しているからという理由で選んだものであるが、声点の検索は『日本書紀神代巻諸本声点付語彙索引』（鈴木豊氏編、アクセント史資料研究会）によっている。筆者自身は影印すら未見である。

## 二、声点の記述と整理

本節では、「書紀抄本」の声点について記述し整理して、次節での分析、検討のための準備としたい。

声点を記述し整理するにあたっては、次の如き基準を設けた。

- (i) 記述の対象は、「書紀抄本」の声点のうち、全加点の自立語のみとする。

- (ii) 語彙の配列は、まず品詞(⑦無活用自立語⑧動詞⑨形容詞)によって分け、次に、拍数(活用語は活用形式も考慮)ごとにその示す声調によって分類する。

- (iii) 三拍以内(活用語は終止形の拍数)の語彙については、更に

比較資料の声点の示す声調によって下位分類する。四拍以上の語彙については、これを行なわない。

(iv) 各語彙ごとの記載は次のようにする。

1、語形は片仮名で、語義は漢字で示す。仮名遣は原文に従う。

清濁はここでは記さない。

2、声調は(へ)内に(平)、(上)のように記す。声調の右傍点は双点であることを示す。

3、付属語の接した形の場合は、( )内に(へ)、(を)のように記す。この場合、片仮名は傍訓であることを、平仮名はヨコト点であることを、それぞれ示す。それ以外のものは、(×)と記す。声点の差されている場合は、右傍に平、上のように記す。

4、所在は(上・中・下)冊、丁数(オ・ウ)の順に記す。

(i)において、全加点の自立語のみに対象を限定したのは、部分加点は語調資料として不完全、かつ煩雑であるからであり、付属語は用例が僅少で十分な考察がし難い故である。(ii)において、無活用自立語を名詞・副詞：の如く分類しなかったのは、分類してもさ程意味があるとも思われないことによる。

なお、(iii)において、比較資料に差声例がなく声調の比較が行えない語彙については、『類聚名義抄』や御巫本『日本書紀私記』等、南北朝以前の声調資料を適宜使用して分類し、\*を付して区別しておいた。

以上の基準によって、「書紀抄本」の声点を記述すると、以下の如くである。

(1) 無活用自立語

I、一拍語(2語)

(A) (上) 2語

(上) 一緒(上) (モ) 中19ウ

(平) 一簀(上) (の) 中20ウ

II、二拍語(43語)

(A) (上上) 18語

(上上) 一蒲陶(上上) (に) 上42オ、刈(上上) (を) 下8ウ、陰(上上)

上(上) 上50ウ、老翁(上上) (を) 下38オ、\*常(上上) (を) 下30オ、(D) \*鱧(上上) (を) 下51オ、(D) \*臍(上上) (を) 下20オ、\*宜(上上) (を) 中33ウ

(上平) 一幸(上上) (を) 下37オ(2例)、海驢(上上) (を) 下47ウ、御処(上上) (を) 上20ウ、八咫(上上) (を) 下17ウ、海(上上)

(の) 上45オ

(平平) 一倉稻(上上) (を) 上38ウ、秉矩(上上) (を) 上41オ

(平上) 一大人(上上) (を) 下4ウ、父(上上) (を) 上32ウ (下29オ) (D) \*都(上上) (を) 中33オ

(B) (上平) 9語

(上平) 一人(上平) (を) 下24ウ、鏡(上平) (を) 下39オ、小戸(上平) (を) 下51オ、\*土師(上平) (を) 中4オ、\*八重(上平) (を) 下10オ

(平平) 一天(上平) (を) 下19オ、黄泉(上平) (を) 上41オ、\*蛆(上平) (を) 上41ウ、\*海(上平) (を) 上16オ

(C) (平平) 4語

(平平) 一嗚呼(平平) (を) 上21ウ、事(平平) (を) 上10オ、陰陽(平平) (を) 上10オ

(平東) 一唯(平平) (E) 上51才・下41才

④ (平上) 12語

(平上) 一父(平上) (E) 下4ウ (A)、峰(平上) (E) 下20ウ、

\*上(平上) (は) 下24ウ、\*未(平上) (X) 下49才

(上上) 一\*常(平上) (X) 下30才、\*鱒(平上) (C) 上53才 (2)

例・下44ウ (2例)

(上平) 一穗日(平上) (の) 下4才

(平平) 一稜威(平上) (C) 中2才 (3例)・下11才 (の) 中5才・

下8ウ、清(平上) (C) 中24ウ (2例)、標火(平上) (C) 下34

ウ、瑞(平上) (の) 中6才(平上) (の) 中6ウ、\*越(平上) (C)

上23才・26ウ

Ⅲ、三拍語 (73語)

① (上上上) 27語

(上上上) 一族(上上上) (X) 上51才、隈(上上上) (を) 下45才 (↓

①)、狹霧(上上上) (E) 中3ウ、土握(上上上) (C) 上39才、

竈(上上上) (X) 上41才、三熊(上上上) (C) 下4ウ (↓B)、

罔象(上上上) (C) 上36ウ (C) 上35才・37才、殯(上上上) (X)

下7才 (↓B)、小汀(上上上) (E) 下9才 (X) 下38ウ、\*機取

(上上上) (C) 下22才、\*頸(上上上) (E) 中8才、\*空手(上

上上) (C) 下47才

(上上平) 一白斂(上上上) (C) 中33才、貧鉤(上上上) (C) 下39ウ

(↓B)、\*籠(上上上) (C) 下38才

(上平平) 一五月蠅(上上上) (X) 下3才(上上上) (上上上) (X)

下34ウ、(↓C)

(平平平) 一氣噴(上上上) (C) 中7才、誓約(上上上) (C) 中3才、

編籬然(上上上) (C) 中19ウ、鶴鶴(上上上) (C) 中33才 (↓B)、

緒(上上上) (を) 下53才、\*首(上上上) (X) 中17才、\*劍柄

(上上上) (X) 中2才、\*髻(上上上) (E) 中2才、\*泉門(上

上上) (E) 上43ウ

(平上上) 一岐(上上上) (C) 上43ウ

(平上平) 一\*背肉(上上上) (C) 下29才 (↓C)

② (上上上) 21語

(上上平) 一幸(上上上) (X) 下19才、貧鉤(上上上) (X) 下45才

(↓A)、殯(上上上) (X) 下15才 (↓A)、若(上上上) (C) 下

34ウ、\*淳浪田(上上上) (の) 下31才、\*胸乳(上上上) (を) 下

20才

(?) 一君(上上上) (は) 下8才

(上上上) 一三熊(上上上) (C) 下4ウ (↓A)

(上上平) 一真澄(上上上) (C) 上33ウ、\*狭物(上上上) (X) 上53

才

(平平平) 一靈異(上上上) (C) 上30才、噴議(上上上) (X) 中2

才、劍(上上上) (を) 下31ウ、\*稱穂(上上上) (を) 下28ウ、\*

高樹(上上上) (E) 下45ウ、\*劍頭(上上上) (ヨリ) 上40ウ、\*

腕(上上上) (E) 中2才・4才、\*垂顛(上上上) (X) 上55才、

\*掘(上上上) (C) 中10才

(平上上) 一平(上上上) (C) 下29才、\*臣(上上上) (X) 中4才

③ (上上平) 3語

(上平平) 一五月蠅(上上上) (X) 下3才 (↓A)

(上上上) 一日繼(上上上) (C) 下19才

(平平平) 一玲瓏(上上上) (E) 下35ウ

① (上上上) 5語

(上上上) 一 隈 (上上上) (に) 下10オ (↓A)

(平上上) 一 阿曇 (上上上) (こ) 上45ウ、\*主人 (上上上) (こ) 下47ウ、\*大鈎 (上上上) (こ) 下48オ、\*弓燻 (上上上) (こ) 中2オ

② (平上平) 4語

(平上平) 一 鶴鶴 (平上平) (を) 下7オ (↓A)

(平上上) 一 妹 (平上平) (は) 上24ウ、コヲロ (平上平) (こ) 上24オ、

③ (平上上) 6語

(平上上) 一 安忍 (平上上) (ナル) 上32オ、岐 (平上上) (こ) 上43ウ (の) 下24ウ、\*幾日 (平上上) (か) 下48オ、\*何処 (平上上) (に) 下20ウ

(平上上) 一 \*長田 (平上上) (は) 上55オ (を) 中8ウ

(上上上) 一 \*双生 (平上上) (こ) 上22ウ

④ (平上平) 14語

(平上平) 一 有如 (平上平) (三) 下30オ、\*背肉 (平上平) (こ) 下11ウ (↓A)

(?) 一 五十鈴 (平上平) (の) 下21オ

(上上平) 一 \*赤女 (平上平) (こ) 下39オ、\*吾平 (平上平) (の) 下54オ、\*口女 (平上平) (こ) 下44ウ、\*狭田 (平上平) (こ) 上55オ、中8ウ、\*饒石 (平上平) (こ) 下37オ (2例)

(上上上) 一 探女 (平上平) (こ) 下6オ

(平上平) 一 吐 (平上平) (こ) 上37オ、手玉 (平上平) (こ) 下35ウ、千引 (平上平) (こ) 上42ウ、\*東 (平上平) (こ) 下22オ、\*背 (平上平) (は) 上50ウ、中2オ (の) 下19ウ

IV、四拍語 (69語)

① (上上上上) 27語

味稻 (上上上上) (こ) 下8オ、雷 (上上上上) (の) 上47ウ、気

(上上上上) (こ) 下9オ、五十田狭 (上上上上) (こ) 下22ウ、鹿

児弓 (上上上上) (こ) 下4ウ、事解 (上上上上) (こ) 上51オ、酒

槽 (上上上上) (は) 中21オ、後手 (上上上上) (は) 下48オ (↓①)、

竹島 (上上上上) (は) 下35オ、臂 (上上上上) (は) 中2オ (の)

中8オ、思慮 (上上上上) (の) 中14オ、著標鼻 (上上上上) (こ) 下53オ、道返 (上上上上) (こ) 上43ウ、朋友 (上上上上) (こ) 下15オ (↓②)、鳥船 (上上上上) (こ) 下23オ、櫛縮 (上上上上) (こ) 上41ウ、人民 (上上上上) (を) 上39オ、一児 (上上上上) (を) 上39オ、螢火 (上上上上) (の) 下3オ、鬘 (上上上上) (を) 上42オ、造 (上上上上) (こ) 中19ウ、纏綿 (上上上上) (は) 下48オ、八人 (上上上上) (を) 上42オ、俳人 (上上上上) (タラン) 下46オ、俳優 (上上上上) (こ) 下52ウ、少童 (上上上上) (こ) 上38ウ (↓③)、煩 (上上上上) (こ) 上43ウ

② (上上上上) 18語

海辺 (上上上上) (は) 下38オ、41オ、47オ、癡駭鉤 (上上上上) (は) 下48オ、面足 (上上上上) (こ) 上16ウ、川雁 (上上上上) (を) 下7オ、興言 (上上上上) (こ) 上45オ、中7ウ、常人 (上上上上) (上) 上上平) (ララ) 下44オ、月弓 (上上上上) (こ) 上30ウ、月夜見 (上上上上) (こ) 上30ウ、一片火 (上上上上) (を) 上50オ (↓④)、斑駒 (上上上上) (う) (を) 中8ウ、遺合 (上上上上) (こ) 上20ウ、頭辺 (上上上上) (は) 上39オ、百取 (上上上上) (こ) 上53ウ (↓⑤)・⑥、八握 (上上上上) (三) 上55オ、八重雲 (上上上上) (を)

下 21 才、吉葛(上上上平)を、上 36 才、雄詰(上上上平)× 中 2 才、雄走(上上上平)× ② 下 8 才

③ (上上平) 1 語

既切(上上平)下 53 才

④ (上上上) 12 語

伊契諾(上上上)上 16 才、伊契冉(上上上)上 16 才、  
稲種(上上上)上 55 才、楳触(上上上)下 20 才、  
土(上上上)下 38 才、雉(上上上)下 38 才、月読(上上上)下 38 才、  
上(上上上)上 30 才、朋友(上上上)下 8 才、  
篤愛(上上上)下 48 才、堞(上上上)下 38 才、百取(上上上)下 29 才、  
45 才(3 例)・ウ・下 47 才、下 39 才、下 39 才(下 A)上

⑤ (上上上) 2 語

虚天(上上上)下 29 才、百取(上上上)下 47 才、  
⑥・⑦

⑧ (平平平) 1 語

沫蕩(平平平)上 17 才

⑨ (平平平) 2 語

泥土煮(平平平)上 16 才、句句酒馳(平平平)上 28 才

オ

⑩ (平上上) 1 語

沙土煮(平上上)上 16 才

⑪ (平上上) 1 語

陽(平上上)上 11 才

⑫ (平上上) 4 語

後手(平上上)下 42 才(下 A)、太占(平上上)下 26 才、滅鉤(平上上)下 45 才、女王(平上上)下 51 才

⑬ (平上上) 4 語

粟田(平上上)下 34 才、香香背男(平上上)下 22 才、  
一片火(平上上)上 41 才(下 B)、雄柱(平上上)上 41 才

⑭ (平上上) 2 語

軻遇突智(平上上)上 35 才、侍者(平上上)下 42 才

V、五拍語(16 語)

⑮ (上上上) 2 語

恨言(上上上)下 53 才、幸魂(上上上)中 32 才

オ

⑯ (上上上) 7 語

天折(上上上)上 32 才、寛坐(上上上)下 52 才、  
作金(上上上)下 25 才、先驅(上上上)下 19 才、  
称辞(上上上)中 17 才、服御之物(上上上)下 29 才、  
諸手船(上上上)下 9 才

⑰ (上上上) 1 語

赤酸醬(上上上)中 21 才、下 19 才

⑱ (上上上) 2 語

高籠(上上上)上 47 才、頓使(上上上)下 34 才

ウ

⑲ (上上上) 2 語

作色(上上上)上 53 才、下 8 才、閻籠(上上上)上 53 才、閻籠(上上上)上 53 才

平) (と) 上40ウ

⑥ (平上上上上平) 3語

稱背腔 (平上上上上平) (を) 下9ウ、寛坐 (平上上上上平) (こ) 下9

オ (↓) ⑦、田心姫 (平上上上上平) (の) 中7オ

VI、六拍語 (10語)

① (上上上上上上) 1語

俳優者 (上上上上上上) (タラン) 下53オ

② (上上上上上上) 2語

關山祇 (上上上上上上) (を) 上40ウ、鶴 (上上上上上上) (を)

上27オ

③ (上上上上上上) 1語

石凝姥 (上上上上上上) (の) 下18ウ

④ (上上平上上平) 1語

離山祇 (上上平上上平) (と) 上49オ

⑤ (上上上上上上) 1語

武鬘槌 (上上上上上上) (を) 下9オ

⑥ (上上上上上上) 1語

高胸 (上上上上上上) (を) 下6ウ (↓) ⑥

⑦ (上上上上上上) 1語

高胸 (上上上上上上) (を) 下14ウ (↓) ⑦

⑧ (平上上上上上) 2語

磐椽樽船 (平上上上上上) (に) 上31オ、無目籠 (平上上上上上) (を)

下38オ

⑨ (平上平上上上) 1語

手置帆負 (平上平上上上) (を) 下25ウ

VII、七拍語 (2語)

① (上上上上上上上) 1語

鶴 (上上上上上上上) (を) 上27オ

② (上上上上上上上) 1語

鶴 (上上上上上上上) (を) 上27オ

(2) 動詞

I、一拍動詞 (3語)

① (上) 2語

(上) 一為 (上) (に) 上41オ、為 (上) (を) 下15オ

(平) 一為 (上) (を) 上37オ

(去) 一得 (上) (を) 上50ウ

② (平) 1語

(平) 一來 (平) (を) 上50ウ

II、二拍四段式動詞 (13語)

① (上上) 4語

(上上) 一足ラ (上上) (を) 下10オ、鳴シ (上上) (を) 上24オ、卷カ

(上上) 一祝キ (上上) (を) 下28オ

② (上上) 1語

(上上) 一泣キ (上上) (を) 上32オ・34ウ・下7オ

③ (平上) 8語

(平上) 一搔キ (平上) (を) 上19ウ・24オ、勝ッ (平上) (を) 下2ウ、

清シ (平上) (を) 上11オ、成リ (平上) (を) 上24ウ、呪キ

(平上) (を) 下14ウ、座ス (平上) (を) 上15ウ、放ル (平上) (を)

上42ウ、\*満テ (平上) (を) 上38オ



Ⅲ、二拍二段式動詞（8語）

①〔上上〕 2語

〔上上〕—\*向<sup>ム</sup>ケ〔上上〕〔シム〕下4オ

〔上上〕—媚<sup>ヒ</sup>〔上上〕〔て〕下4オ

②〔上平〕 2語

〔上上〕—\*上<sup>ケ</sup>〔上上〕〔テ〕中2オ

〔上上〕—蹴<sup>ケ</sup>エ〔上上〕〔×〕中2オ

③〔平平〕 1語

〔平平〕—作<sup>ツ</sup>〔平平〕〔×〕上24オ

④〔平上〕 3語

〔平上〕—生<sup>レ</sup>〔平上〕〔×〕上15ウ、出<sup>テ</sup>〔平上〕〔×〕下11ウ・51オ

〔上上〕—攀<sup>チ</sup>〔平上〕〔×〕下8オ

Ⅳ、三拍四段式動詞（23語）

①〔上上上〕 4語

〔平平上〕—嬰<sup>ケ</sup>〔上上上〕〔ル〕中8オ（↓②）、未<sup>サ</sup>平<sup>ケ</sup>〔上上上〕

〔リ〕下17オ、\*恚<sup>ク</sup>〔上上上〕〔×〕上34ウ、\*慟<sup>フ</sup>〔上上上〕

〔×〕下8オ

②〔上上上〕 10語

〔上上上〕—仰<sup>キ</sup>〔上上上〕〔×〕下39オ、啼<sup>ヒ</sup>〔上上上〕〔×〕下7オ、

\*董<sup>カ</sup>リ〔上上上〕〔×〕上38オ、\*塞<sup>ヒ</sup>〔上上上〕〔テ〕上42ウ

〔平平上〕—誓<sup>ヒ</sup>〔上上上〕〔×〕下12ウ、嬰<sup>ケ</sup>〔上上上〕〔ル〕中5

ウ（↓①）、臨<sup>ヒ</sup>〔上上上〕〔×〕下17オ、\*耦<sup>ヒ</sup>〔上上上〕〔×〕

上19オ、\*誥<sup>ヒ</sup>〔上上上〕〔×〕下33オ、\*溢<sup>ヘ</sup>〔上上上〕〔リ〕

上50オ

③〔上平平〕 2語

〔平平上〕—燈<sup>ス</sup>〔上平平〕〔×〕上41ウ、\*握<sup>リ</sup>〔上平平〕〔×〕中2

オ

④〔上上上〕 6語

〔上平東〕—\*默<sup>サ</sup>〔上上上〕〔×〕上51オ

〔平平平〕—頗<sup>シ</sup>〔上上上〕〔×〕下17オ

〔平平上〕—潛<sup>キ</sup>〔上上上〕〔×〕上45オ、誥<sup>リ</sup>〔上上上〕〔×〕中2オ、

\*債<sup>ラ</sup>〔上上上〕〔サル〕下46オ、\*防<sup>キ</sup>〔上上上〕〔×〕下28ウ

（↓⑤）

⑤〔平上上〕 1語

〔上上上〕—抱<sup>カ</sup>〔平上上〕しめ 下53ウ

⑥〔平上平〕 2語

〔平平平〕—\*防<sup>カ</sup>〔平上平〕〔マシカハ〕下10オ（↓①）

〔平平上〕思<sup>ス</sup>〔平上平〕〔メ〕下2ウ、\*防<sup>キ</sup>〔平上平〕〔テシ〕下10

オ（↓②）

Ⅴ、三拍二段式動詞（7語）

①〔上上上〕 5語

〔上上上〕—又<sup>ヘ</sup>〔上上上〕〔×〕上53ウ、荒<sup>ヒ</sup>〔上上上〕〔タリ〕中31

ウ、雅<sup>ヒ</sup>〔上上上〕〔タリ〕下44オ

〔平平上〕—\*預<sup>ケ</sup>〔上上上〕〔×〕下44ウ、\*泣<sup>チ</sup>〔上上上〕〔×〕上

47オ・下7オ（×）下30オ

②〔上平平〕 1語

〔平平上〕—集<sup>ヘ</sup>〔上平平〕〔×〕下3ウ・48オ（↓③）

③〔上上上〕 2語

〔平平上〕—捫<sup>フ</sup>〔上上上〕〔×〕下53オ、\*集<sup>ヘ</sup>〔上上上〕〔×〕下39

オ（↓④）

VI、四拍一段式動詞（1語）

- ① (平平平) 1語  
 淹<sup>ツル</sup>キ (平平平) (て) 上11オ

VII、四拍四段式動詞（14語）

- ① (上上上上) 4語  
 雙<sup>フ</sup>フ (上上上上) (×) 中7ウ、強<sup>イシ</sup>禦<sup>シ</sup>ウ (上上上上) (×) 下34ウ、  
 輝<sup>ヒ</sup>ク (上上上上) (×) 下3オ、透<sup>ヒ</sup>蛇<sup>コ</sup>フ (上上上上) (×) 下43ウ  
 ② (上上上上) 8語  
 教<sup>イ</sup>イ (上上上上) (て) 上25オ、悶<sup>アツ</sup>熱<sup>ヒ</sup> (上上上上) (×) 上37オ、  
 喧<sup>ヒ</sup>響<sup>ヒ</sup> (上上上上) (×) 下34ウ、慮<sup>リ</sup> (上上上上) (て) 中9ウ、  
 轟<sup>キ</sup>キ (上上上上) (×) 中1ウ、塞<sup>フ</sup>リ (上上上上) (×) 上43ウ、  
 不<sup>ミ</sup>平<sup>ミ</sup> (上上上上) (×) 中15オ、匍<sup>ヘ</sup>匍<sup>ヘ</sup>イ (上上上上) (×) (て) 上  
 39オ

- ③ (上上上上) 1語  
 溺<sup>セ</sup> (上上上上) (×) 下40オ

- ④ (上上上上) 1語  
 驚<sup>イ</sup> (上上上上) (て) 下39オ

VIII、四拍一段式動詞（4語）

- ① (上上上上) 2語  
 衰<sup>アツ</sup>弱<sup>レ</sup> (上上上上) (×) 中1オ、混<sup>マ</sup>レ (上上上上) (×) 上15オ

- ② (上上上上) 1語  
 混<sup>レ</sup> (上上上上) (タル) 上10オ (↓) ①

- ③ (上上上上) 1語  
 低<sup>レ</sup> (上上上上) (×) 下47オ

- ⑤ (上上上上) 1語  
 秀<sup>サ</sup>起<sup>キ</sup>ツル (上上上上) (×) 下35ウ

IX、五拍四段式動詞（5語）

- ① (上上上上上) 5語  
 浮<sup>ウ</sup>沈<sup>シ</sup>在<sup>リ</sup> (上上上上上) (×) 下29オ、崩<sup>カ</sup>リ (上上上上上) (×)  
 下13オ、飄<sup>ヒ</sup>掌<sup>シ</sup>ス (上上上上上) (×) 下53オ、轟<sup>シ</sup> (上上上上上) (×)  
 (×) 中11ウ、散<sup>シ</sup> (上上上上上) (×) 中2オ

(3) 形容詞

I、二拍シク活用形容詞（1語）

- (上上上上) 1語

(上上上上) 1強<sup>ツ</sup>暴<sup>ル</sup> (平上上上) (×) 中31ウ

II、三拍7活用形容詞（1語）

- (上上上上) 1語

(平平平) 1憐<sup>シ</sup> (上上上上) (ト) 下2ウ (ト) 下44ウ

III、三拍シク活用形容詞（7語）

- ① (上上上上) 2語

(平平平) 1可<sup>ク</sup>美<sup>シ</sup> (上上上上) (×) 下47ウ (↓) ②、\*貧<sup>シ</sup> (上上上上) (×) 下49オ

- ② (上上上上) 2語

(平平平) 1頭<sup>シ</sup> (上上上上) (×) 下4ウ、激<sup>シ</sup> (上上上上) (×) 下9オ

- ③ (平平平) 2語

(平平平) 1可<sup>ク</sup>美<sup>シ</sup> (平平平) (×) 上21ウ (↓) ④、嬉<sup>シ</sup> (平平平) (×) 上21ウ

- ④ (上上上上) 1語

- ⑤ (上上上上) 1語  
 靈<sup>シ</sup>異<sup>シ</sup>キ (上上上上) (×) 上30オ

④ (平平上平) 1 語

(平平上平) 1 精シク (平平上平) (×) 上11オ

IV、四拍ク活用形容詞 (3 語)

(上上上上) 3 語

不祥シ (上上上上) (×) 上21ウ・52オ、扶疏シ (上上上上) (×)

下38ウ、醜キ (上上上上) (×) 上41ウ・下17オ

V、四拍シク活用形容詞 (1 語)

(上上上平) 1 語

妙美シ (上上上平) (×) 下42ウ

### 三、声点の分析

本節では、前節における声点整理の結果をもとに、総合的に分析を試みたい。但し、紙幅の都合等もある故、(1) 語頭低音連続型の去就、(2) 卓立型、(3) ●●○型の回避、の三点に絞って考察することにした。

#### (1) 語頭低音連続型の去就

古写本系において語頭低音連続型(○○、○○●等)のアクセントを示す語は、「書紀抄本」では多くその語頭低音連続を解消している。三音節語までその主要な例をあげれば、次の如くである。

- (イ) (平平上平) 天、黄泉、蛆、海
- (ロ) (平平上平) 稜威、清、燧火、瑞、越
- (ハ) (平平上上上上) 氣噴、誓約、輪轉然、鶴鷓、結、首、劍柄、鬚、泉門
- (ニ) (平平平上上上平) 靈異、噴讓、劍、稻穗、高木、劍頭、腕、

垂類、掘

(ホ) (平平平上平上平) 吐、手玉、千引、東、背、防カ

(ヘ) (平平上上上上平) (上上上上) (×) 阿曇、主人、大鈞、弓燭、燈ス、

握リ、潜キ、詰リ、債ラ、防キ、集へ、捫フ

(ニ) (平平上上上上平) 平、臣、誓ヒ、嬰ケ、臨睨リ、耦ヒ、詰

ビ、溢へ、預ケ、泣チ

このうち、(イ)(ハ)の変化は、南北朝期を中心と起ったアクセント変化でいうところの規則的变化に相当するものである。他は個別的变化ということになるが、ともあれ(イ)(ハ)の如き変化が相当数存するという事実は、「書紀抄本」の声点が中世アクセント変化の洗礼を既に受けていることを物語るものと言えよう。

しかるに、「書紀抄本」にはまた、依然として語頭低音連続型を示す声点の差された語が、少数ながら存する。すなわち、次の如き例である。

(ア) (平平) 嗚呼、事、陰陽、作ツ

(イ) (平平平) 鷓鴣、妹、コヲロ、鏝、淹井、可美シ、嬉シ

(ウ) (平平平平) 沫蕩

(エ) (平平平上上) 泥土煮、句句廻馳

(オ) (平平上上) 沙土煮

(カ) (平平上上平) 陽

部分加点例にまで手を広げればその数は多少増えるとは言え、「書紀抄本」において語頭低音連続型が少数派に属することは間違いないところである。

このように、「書紀抄本」の声点には、語頭低音連続型に関して二通りの対応が見られる訳であるが、これはどのように解したらよい

であろうか。

大野晋氏によれば、○○○●↓○○○の変化は○○○○↓●○○○の变化より遅れて起こったと考えられるという。このことは、他の先学によっても確認、支持されているから、まず定説と言つてよからう。「書紀抄本」の声点がそういう微妙な時期のアクセント体系を反映した資料であるならば、一応語頭低音連続型が残っていても不思議はないということになるのであるが、どうもそのようには解せないようなのである。

何となれば、「書紀抄本」では○○○●↓○○○(●○○●)の如き変化は既に殆んど完了していると思なされるからである。○○○●↓○○○の変化は終わっているのに○○○や○○○が変化していないというのは、右の定説に照らして明らかに矛盾しよう。

案ずるに、こゝはやはり、「書紀抄本」の声点に混質性を認め、両者をそれぞれ別の体系に属するものと見なした方が適當ではなからうか。すなわち「書紀抄本」には、南北朝以前の古いアクセント体系を反映する声点(少)と、それ以降の新しいアクセント体系を反映する声点(多)とが混在していると考えるのである。何故両者の声点が共存し得たのかという問題は残るけれども、一応このように解しておきたい。

## (2) 卓立型

多拍語はいざ知らず、三音節語に卓立型(●○○●)の如く、一語の中で高音拍が低音拍をはさんで存在するもの( )があらわれるということは、南北朝以前でもそう多くはなかったと思われる。しかるに、「書紀抄本」の声点にはそのような例が少なくない。品詞別にその例を示せば、次の如くである。

- (イ) 隈、阿曇、主人、大鈎、弓楯
- (ロ) 黙サ、頗傾シ、潜キ、詰リ、償ラ、防セ、捫フ、集ヘ
- (ハ) 顕シ、激シ

右の例のうち、(イ)の「隈」、(ロ)の「黙サ」を除けば、いずれも南北朝以前○○●乃至○○○型であった語ばかりである。通説によれば、○○○●↓○○○の変化の過渡的段階として、●○○型が存在したということになってから、「書紀抄本」の上上上という差声はその反映と考えれば、ごく自然に解釈が可能である。しかしてこの声点は、「書紀抄本」の新しい声文に反映しているアクセント体系の時期を更に特定する手掛りを与えてくれるのである。

桜井茂治氏によれば、室町初期のアクセント資料と見なされる「談議書」においては、南北朝以前○○●型の語が●○○●、●○○●両様に表記されているという。そして、○○○●↓○○○の変化が完了したのは室町中期頃と推定されている。氏の説に従うならば、「書紀抄本」の新しい声点は、室町初期頃のアクセント体系を反映しているということになる。

しかしてこの推定はまた、奥村三雄先生が「書紀抄本」を「室町中期以前のアクセント資料と言ふべき」資料として位置づけられたこととも矛盾しない訳である。

尤も、「書紀抄本」の声点には、以下示す例のように、殊更に卓立型をとっているとおぼしい例もあり、注意を要する。

- 楳触、塩土、月読、朋友、百取(以上、上上平上)、石凝姥(上上上平上)、高胸(上上上上平上)

多拍語の例ばかりであるが、右の例はいずれも、語末を上昇調で発音する必要はなかったように思われる。「書紀抄本」が卓立型(語

末の上昇調と言うべきか)を強く志向する文献であるとすると、先程の上平上という声点も、ラング的存在としてどの程度認めてよいものか、いささか怪しくなってくるのである。平曲の折声のように、本来●○○の語までが●○○としてあらわれるようなことは、「書紀抄本」の声点にはないとは言え、この点についてはなお考える余地がありそうである。

### (3) ●○○型の回避

京都方言における●○○型の回避現象については、奥村三雄先生に詳しい論者がある<sup>注8</sup>。先生は其中で、特に「書紀抄本」の声点に言及し、●○○型の回避傾向が認められる最古の資料として位置づけられている。筆者は、先生のこの結論自体には、別に申し述べることもないのであるが、●○○型の回避は「書紀抄本」の声点の著しい特徴でもあるし、いささかつけ加えるべきこともある故、ここに取り上げることとしたのである。

まず、用例から示そう。「書紀抄本」における●○○型の回避例として多く見られるものは、次の二種類の变化である。

- (イ) (●○○) (●○○) ↓ (●○○) ↓ (●○○) ↓ (●○○) ↓  
 \*誓約、\*幅轆然、\*鷓鴣、\*楮、\*首、\*劍柄、\*髻、\*泉門  
 (ロ) (●○○) (●○○) ↓ (●○○) ↓ (●○○) ↓ (●○○) ↓  
 \*饒石、\*吐、\*手玉、\*干引、\*東、\*背、\*防カ

(イ) について言えば、助詞ノが接続したもの(氣噴、誓約、鷓鴣)は、或いはその例から除かるべきであるかも知れないが、それにしても9語は残る計算になる。ちなみに、「書紀抄本」でその逆の变化を辿ったものも示せば、次の如くである。

- (イ) (●○○) ↓ (●○○) ↓ (●○○) ↓ (●○○) ↓ (●○○) ↓ (●○○) ↓

### (ロ) (○○●) ↓ (○○●) ↓ (○○●) ↓ (○○●) ↓ (○○●) ↓ (○○●) ↓

これによっても知れる如く、「書紀抄本」における●○○型の回避傾向は、少なくとも●○○型及び○○●型との間では、存在することが確実である。ところがもうひとつ、奥村先生が一般に●○○型から变化することの多かつた型としてあげられている●○○型に関しては、次の如く結果は否定的なのである。

- (ハ) (●○○) (●○○) ↓ (●○○) ↓ (●○○) ↓ (●○○) ↓ (●○○) ↓  
 (ニ) (●○○) (●○○) ↓ (●○○) ↓ (●○○) ↓ (●○○) ↓ (●○○) ↓  
 \*誓ヒ、\*嬰ゲ、\*臨睨リ、\*耦ヒ、\*語ヒ、\*溢ヘ、\*預ケ、  
 \*泣チ

動詞の例はひとまずおくにしても、●○○型の回避に伴う●○○型化は、少なくとも「書紀抄本」の声点には、まだあらわれていないようである。そう言えば、全田一春彦氏も、●○○↓○○○の变化は●○○↓○○○の変化よりも遅れて起こったというふう述べておられるが<sup>注10</sup>、「書紀抄本」の声点はそれを如実に示している訳で、実に興味深いと言わねばならない。

最後に、①の動詞の例の解釈であるが、量的に見て、これを偶然の結果と見る訳にはいきそうにない。或いは現代語における●○○型のように、その語形態(語幹)「拍+語尾一拍」が影響したものかも知れないが、よくわからない。後考に俟たい。

### 注

1 『日本書紀纂疏/日本書紀抄』(天理図書館善本叢書27、八木書店)の影印によった。  
 2 注1文献解題。

- 小林千草氏「清原宣賢系日本書紀抄諸本の基礎的考察」(先抄本)を中心  
に」(抄物研究2、S52)
- 3 『国宝日本書紀神代書紀神代巻』(法蔵館)の影印によった。
- 4 『古代史籍集』(天理図書館善本叢書1、八木書店)の影印によった。
- 5 大野晋氏「仮名遣の起源について」(『国語と国文学』、S25・12)
- 6 桜井茂治「アクセント体系変化の時期について」(『名義抄』から「補忘  
記」へ)、『国語と国文学』、S37・9―11)
- 7 奥村三雄先生「アクセントの変化―アクセント型式と所属語彙の問題」  
(『論集日本語研究』)(『歴史篇、明治書院)
- 8 ↓注7
- 9 ノ接続形のアクセントについては、奥村三雄先生『平曲譜本の研究』(S  
56、桜楓社)497、498頁、及び544、545頁を参照されたい。
- 10 金田一春彦氏「国語のアクセントの時代的変遷」(『国語と国文学』37、S  
35・10)